

膝蓋大腿関節障害の治療

膝前面痛や膝蓋骨不安定症といった膝蓋大腿関節障害は、日常診療でたびたび遭遇する疾患です。比較的発生率が高く、臨床研究や基礎研究が盛んであるにもかかわらず、その病態は未だ謎に包まれていることから、“The black hole of orthopedics”とも表現されています。膝蓋大腿関節障害の歴史をさかのぼると、1906年に Bűdinger が外傷後に生じた軟骨の亀裂を報告したのが最初とされています。その後 1928 年に Aleman が同様の膝蓋軟骨所見を “chondromalacia post-traumatica patellae” と提唱して以来、膝蓋骨軟化症として報告されてきました。本邦においては、1965 年頃までは膝蓋骨軟化症と診断される症例はまれであったと記載されていますが、1970 年代の後半から徐々に関心が集まり、膝蓋大腿関節に生じた症候群として議論されてきました。

今日では、膝蓋大腿関節障害の主因を膝蓋骨不安定症、オーバーユースによる障害、さらには膝蓋大腿関節症として病態の解明が進められ、新たな治療方法が開発されています。しかしながら、膝蓋大腿関節障害の病態は多岐にわたり、症例ごとに有する素因や程度が様々であることから、それぞれに最適な治療方針の決定が求められます。治療方法の選択を間違えると、膝蓋骨不安定感が残存するため日常生活やスポーツ活動に支障をきたし、さらには膝蓋大腿関節症を引き起こす原因となります。

本特集では「膝蓋大腿関節障害の治療」について、専門的かつ情熱をもって取り組んでこられた先生方にご寄稿いただきました。まず本症の病態について詳細にご解説いただき、次に、保存治療とその限界について多施設研究の結果をもとにご解説いただきました。手術治療においては、自家腱と人工靱帯を用いた内側膝蓋大腿靱帯再建術、小児の膝蓋骨脱臼に対する手術、脛骨粗面移行術、軟骨損傷の治療、膝蓋大腿関節形成術、最後に膝蓋大腿関節置換術について、各術式の適応となる病態と実際の手術方法、術後の成績についてご説明いただきました。本特集により膝蓋大腿関節障害についての知識と理解が深まり、治療成績の向上につながるものと確信しています。是非、本特集をお読みいただき、皆様の診療の一助となることを期待しております。

(木村由佳)